

はじめに、神話の中に「カミ」が出てくるまでには、永い時間が必要だった。その順序としては「人→神人→神」の順になっていて、歴史書的に云うと「人話→神人話→神話」の順となっています。この事はどういう意味を持つのか。実は「神話は新しい。人話が古い」ということになってきます。これから、このような観点で、日本古代史の「カミ」とりわけ、古層の神名「ち」「け」「そ」「くい」「くま」について、考えてまいります。

まず、射日（しゃじつ）神話について考えます。



出典：異文化を学ぶ「オロチの射日神話より」

極東ロシアの日本海に面した地方に暮らすオロチという先住民族に次のような神話がある。昔、大地が固まりきっていないころ、太陽が三つあり、できたての大地は熱くて生き物が住めなかった。その時、ハダウという神が二つの太陽を弓で射落とし、一つだけ残した。その後、ハダウはワシとカラスを創（つく）り出し、それから人間が生まれた。あるいは、太陽が三つあったころは大地がとても熱く、人は水中や空中で暮らしていた。そこで二つの太陽を射落としてようやく涼しくなり、地上で暮らすようになった。

太陽系創成と地球誕生の過程を述べる壮大な話だが、これは「射日（しゃじつ）神話」と呼ばれる創世神話の一種だ。まさか太陽系の形成過程を人類が記憶していたわけではないが、類似の神話はウデヘやナーナイなどのオロチに隣接する先住民族のほか、中国、朝鮮半島、日本、台湾などに見られる。

オロチ、ウデヘ、ナーナイはツングース系の言語と文化をもつ人々。ツングース系の人々の遠い祖先は、古代中国で「東夷（とうい）」と呼ばれた弓矢のうまさで知られた人々と関係する。東夷は現在の中国山東省あたりを中心にしたといわれるが、太陽を射るというモチーフはそのあたりにいた遠い祖先からの記憶かもしれない。

出典：国立民族学博物館 佐々木史郎、毎日新聞夕刊（2008年11月5日）に掲載

また中国には英雄が複数の太陽を射落として世界を救ったという射日神話があります。最も有名なのは漢族の“淮南子（えなんじ）”に書いてある羿（げい）が10個の太陽のうち9個を射落としたというのですが、中国各地の少数民族や漢族の間ですら様々なバリ



エーションがあり、太陽の数には差があるものの、複数の太陽を射落とすという点では一致しています。

この太陽を運ぶ鳥、あるいは太陽の中に住んでいる鳥、または太陽の精そのものが3本足の鳥または鶏です。

十日神話(漢族)：湯谷（ようこく）には扶桑の木が伸びていて、十個の太陽が沐浴するところ。そこは黒齒国の北にある。水の中から大木が生えていて、その下の枝には九個の太陽が、上の枝には一個の太陽がいる。“山海経”の“海外東経”より

堯（ぎょう）帝の時代に十個の太陽がいっせいに出来、草木は皆焼け焦げた。堯は羿（げい：弓の名人）に、この十個の太陽を射よと命じた。（羿の射た矢は）そのうちの九個の太陽に命中した。（九個の太陽の）九羽の鳥は皆死んでしまい、羽翼が落ちてきた。
“淮南子”より

解説：山海経（せんがいきょう）：中国古代の地理書。18巻。作者・成立年未詳。戦国時代の資料も含まれるが、前漢以降の成立とされる。洛陽を中心に地理・山脈・河川や物産・風俗のほか神話・伝説などを収録。出典：デジタル大辞泉

解説：淮南子（えなんじ）中国、前漢時代の哲学書。21編。淮南（わいなん）王劉安（りゅうあん）が編纂（へんさん）させた「鴻烈（こうれつ）」の現存する部分。道家思想を基礎に周末以来の諸家の説を取り入れ、治乱興亡・逸事などを体系的に記述。
出典：デジタル大辞泉

百田弥栄子の「中国神話の構造」や「中国の伝承曼荼羅」に詳しく書いてありますので、それを紹介します。

四川省塩辺県宝公社龍塘生産隊の苗（ミャオ）族の葬送歌

九個の太陽と八個の月がいっせいに出来た。

羿が弓矢で八個の太陽と七個の月を射落とした。

残った一つずつの日月は隠れてしまった。

天地は真っ暗。

オンドリが呼んだ。

オンドリは翼をたたいて三度鳴いた。

すると日月が顔を出した。

広西区南丹県の瑶（ヤオ）族の一支族とされる白褲瑶（ペークーヤオ、苗族に近い）の葬俗歌

昔、太陽が九つあった。

その上九つの月も天にかかっていた。

八日八月を射たのは武吉（ウーチー）。

武吉はみんなに話して聞かせた。

貴州省黔东南州雷山县西山区麻科寨の苗（ミャオ）族の子宝祈願「招礼儀式」

天下に達恰（タチャ）と沙恰（サチャ）兄妹二人のみ。

二人は金を掘って十二日を造り、銀を掘って十二月を造った。

余りに暑いので、兄妹は弓矢を工夫して、十一日十一月を射落とした。

よくよく考えてみると「これは大変な事だ」と思います。なぜかと言うと、「農耕社会」以前の「狩猟社会」に誕生した説話が二十世紀の極東ロシアの日本海に面した地方や中国各地の少数民族や漢族の間に伝わっていて、それを学者が採集したという事になりま

す。現代の常識では、現在に伝わっている神話や説話は、だいたい江戸時代中期、古くても室町ぐらいで、それ以前はとても無理ですというのが、だいたい民俗学の常識だそうです。ところが、今のが正しければ室町どころではない。「農耕社会」どころではなく「狩猟社会」に誕生した説話が今に伝わっているという事になってくる。非常に、怖いテーマです。ところが荻原真子さんという学者の方が「沿海州には石を投げて太陽を落す話があるんです。」と言っている。

解説：荻原真子（おぎはら しんこ）文化人類学・民俗学の研究者：アムールランド文化とアイヌ物質文化形成に関する言語・生態人類学的研究：2013 年度: 千葉大学, 名誉教授「アイヌ口承文芸」等がある。大阪の民族学博物館で民俗学シンポジウム（1985 年頃）東京国際大学の助教授、ロシア語が堪能で、ソ連の沿海州、そのオロチ族、オロチョン族、など原住民に伝わっている説話を、ソ連の学者がロシア語で採集したのを訳して報告。いわゆる沿海州における射日神話の問題の報告。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：百田 弥栄子（ももた やえこ、1944 年 - ）は、中国文化研究者。慶應義塾大学文学部国文科卒。大学非常勤講師などをへて、中日文化研究所教授。アジア民族造形文化研究所教授 出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

狩猟（しゅりょう）といえば、「昔から狩猟はあった」という頭で考えてきましたが、ところがじつは、その「狩猟時代」というのも上限があるのではないかと。つまりそれ以前には、「狩猟なき何十万年」が、「弓矢なき何十万年」が流れていたのではないかと。言葉にすると、いわゆる「投石社会」です。

人間は、そして弓矢を発明して、「或る日」というのは短絡的ですが、弓矢を発明してにわかに威張りはじめた。それまでは動物の中で人間という動物は、たいした動物ではなかったと思うんです。走る力だって跳ぶ力だって叫ぶ力だって遠くを見る力だって、人間よりずっとすぐれた動物がたくさんいます。「一番」というのは大袈裟かも知れませんが、たいへんみすばらしい存在が人間ではなかったのか。



2001 年宇宙の旅より）

NHK の番組などを見ると、身を細くして地球をとぼとぼ歩いていたのではないと思うのですが、ところが、発明（知恵）・道具を作る力で、弓矢を発明してにわかに他の動物に対して強さを発揮しはじめた。と考えるとあまり誤りではないでしょう。（写真は、

その証拠に簡単な証明があります。今の動物園へ行ってお猿さんを見ますと、お猿さんは石を投げているけれど、弓矢を使っているお猿さんというのを見たことはありません。動物園だけではない、大自然の中でもないと思われます。

あったらたいへんな発見です。だからお猿さんというのは、まだ弓矢発明以前の時間帯に存在しているのではないかと、広い意味で、お猿さんの一員であるわれわれは、すでに弓矢発明以後の時間帯に入っている。そう言えるのではないのでしょうか。

「射日（しゃじつ）神話の淵源」というふうに考えてみますと、先程の石を投げて太陽を落すという話は、弓矢発明以前の時間帯、いわば「投石社会」に生み出された説話ではないのでしょうか。次をご覧ください。

一人の男と一人の女がいた。三つの太陽があり、大地はなかった。その当時は、草で小舎を立てた。魚が（水から）跳ね出ると焼け焦げて死んだものだ。

草は燃え、そして、小舎も燃えてしまった。男は戻って来て、新しい小舎をつくって待った。太陽が現われたので、彼はそれを殺した。残ったのは二つの太陽だった。彼は小舎から石を投げつけて、もう一つの太陽を殺した。それで残ったのは一つの太陽となった。

出典：ウリチ族（ロシア連邦の極東地域、ハバロフスク地方の先住民：世界大百科事典）

もう簡潔で、これ以上も以下もいらないというような、説話の中の説話という感じがします。ここでは弓矢を使っていない。石を投げて太陽を落すという説話になっています。こんな説話を、もうすでに弓矢が出来て後の時間帯に作ったら本当に笑いものになってしまいます。“石を投げて太陽を落すより、弓矢で落したらどう？”と言われるに決ってます。

ところがまだ弓矢発明以前の時間帯の社会なら、こういう形になるよりしょうがないです。ということで、これは「狩猟社会」という上限を突破してそれ以前の時間帯に誕生した説話が今に伝わっているのではないかとと言えるのではないのでしょうか。

というのは、これを考えついた教授が、授業後学生から「先生、今の、石を投げてという時には、神様はいなかったんですか」こう聞かれたそうです。「要するにその学生が疑問にしたのは、今の話には神様が登場しない。一人の男と一人の女しか登場しない。神様はどうなったんでしょうという質問だったんです。それで教授は、「恐らく、神様はまだ生れていなかったのだであろうと思います」と。答えたそうです。

解説：古田 武彦（ふるた たけひこ、1926 年（大正 15 年）8 月 8 日 - 2015 年（平成 27 年）10 月 14 日）は、日本の思想史学者・古代史研究家。元昭和薬科大学教授。専門は親鸞等の中世思想史だが、むしろ古代史研究において著名である。

つまり、「男と女」というのは人類始まったと同時にわかっていたと思うんです。男と女は、見ればわかります。しかし「神様」というのは、見えないけれど、いるんだという、もうこんな高尚な話ってないわけです。誰も見えないけれど神様というのはいるんだぞ、というんですから、こんな考え方が人類発生と同時に始まったはずはないと考えます。もう、人間の能力が、たいへん抽象化が進んでいってそのあげくの果てに到達した、すごい概念。概念の発見というか、発明というか、概念とすれば発明、一つの事物と考えれば発見である。と教授は考えた。

これも簡単に証明出来るんです。なぜかという、さっきのように、もう一回動物園へ行けばいいんです。祭壇を築いて拝んでいるお猿さんを見たことはありますか。あつたらトップニュースです。しかし、恐らく動物園のみならず、自然の山野でも、お猿さんが祭壇を築いているという話は聞いたことがありません。そのことは、やはりお猿さんはまだ神を発見以前の時間帯にいるのではないのでしょうか。

とすれば、人間というお猿さんは、広い意味で、人間というお猿さんは、ある日、これも短絡的に言いますと、ある日神を発見したことによって、あるいは、神という概念を発明したことによって、人間の精神的な能力は一新し、深さと広さを急速に拡大するに到ったのではないのでしょうか。こう考えても大きく誤ってはいないと思います。

念のために申しますが、いろんな皆さんが、それぞれの信仰をもっておられます。クリスチャンであるとか、いろいろその他ご信仰をもっている方がおられると思うんですが、そういう信仰の立場から見ると、けしからんと言われるかも知れませんが、今言っているのは、信仰の問題ではなくて歴史の問題です。人間の歴史の問題ですので、信仰とは別個にお聞きいただければ幸いであると思います。

さて、こういう立場から今のように、ある段階で神様を発見した。それ以後作られたのが神話です。つまり神様がさっきのように登場して来て弓矢で太陽を落すという活躍を演じられるのは、その社会、お話を聞く「社会」がなければお話が出来ないわけです。その社会の人々が、「神様」という概念を共通して共有しているから、そういう話が成り立つ訳です。「神様」、「え？何？」「そんなの、知らないよ」。というのではお話にならない。だから神という発見があつて、以後はじめて神様は説話の中で活躍を演じられるのであつて、その「発見以前」には神様の活躍の場はないのです。

そうしますと、沿海州の太陽を殺す話は、神様が全然出て来ない。確かにこんな地球の始まりの第一番目みたいな話だから、神様は出て来ていいはずだと思って、先程の学生は、質問したと思います。ところが出て来ないということは、まだ神様は地球上に「誕生」していなかった。だからこの説話には神様は登場の場はなかった。と教授は、答えたと考えられます。



そして、この考え方が認められますと、これからは地球上の神々の話、神話とかそういうものを全部集めて、データベース化して、そして前後（時代順に）関係をつける。

たとえば、アイヌの神話にあります、小人の神様（コロツポックル）がいます。いない、いないとさがし回ったら、葉っぱの陰にかくれて見つからないのを楽しんでいた、などという、本当にいたずらっ子のような神様がいます。あのような神様は、たいへん由緒古い、まだ人類の中で最初に生れたような時期の神様ではないのでしょうか。

じつは『日本書紀』の中に、これと同じテーマが存在します。それは「神生み神話」といいますか。「国生み神話」ということばは皆さんよくご存知ですが。ところが『古事記』『日本書紀』の「国生み神話」の前に、神様が次々生まれるという神話があります。



日本書紀で神が生まれるのは、「人→神人→神」の順になっています。歴史書的に云うと「人話→神人話→神話」の順となっています。この事はどういう意味を持つのか。実は「神話は新しい。人話が古い」ということになってくるのです。

これは名前がないので、仮に「神生み神話」とさせていただきます。この神の生れるタイプは三つのタイプにわかれている。三つしかタイプは有りません。

①一つは神様が一柱生れたというタイプ。

これは（第五）一書で、終りから二つ目のところにあります。

一書に曰はく、天地未（いま）だ生らざる時に、譬（たと）へば海上に浮べる雲の根係（かか）る所無きが猶（ごと）し。其の中に一物（ひとつのもの）生（な）れり。葦牙（あしかび）の初めて[泥/土]（ひぢ）の中に生（おひい）でたるが如し。便（すなは）ち人と化為（な）る。國常立尊と號（まう）す。

[泥/土]（ひぢ）は、泥の下に土、JIS第3水準、ユニコード番号 57FF

これは国常立が一神現われたという、このスタイル一つだけ。

②次は二神が現われたというタイプが二つあります。

一つは（第三）一書、これも読んでみます。

一書に曰はく、天地（あめつち）混（まうか）れ成る時に、始めて神人有す。可美葦牙彦舅尊（うましあしかびひこぢのみこと）と號す。次に國底立尊（くにのそこたちのみこと）。彦舅、此をば比古尼（ひこぢ）と云ふ。

これは二神が現われたというタイプ。

もう一つ（第四）一書も二神が現われたというタイプ。

③あとは三神タイプが全部。本文がそうです。

それから（第一）一書、（第二）一書、（第四）一書の方は二つに分かれてその後半、『古事記』もこれと同型です。それで（第六）一書、みんな三神が現われている。神様の名前は違うが三神が現われたというタイプ。

この三種類しかない。四神・五神が現われたというタイプはないんです、「最初に現われた」という形ではありません。（略～）

（従来は、上記のアンダーラインのところを全て神と解釈して、読んでいました。）

これは“人類は永い無神時代を経ていた”。だからその時代には「神話」はなかったあえて言えば人話 「人の話」「人話の数十万年」が過ぎた。それは「神無き説話」で、つまり「人話」であった。それからやがて「神人話：神のようなチカラを持つ人」の時間帯がやってきた。それで最後に「神話」の段階がきた。といえるの ではないでしょうか。

この点は、ヨーロッパ、アメリカ、ロシアを含めて、神話学では「人類は神話から始まった。」と皆そういう処理をしています。それは違う、という話になってきます。この考え方が、もし間違っていなければ、「神話は新しい。人話が古い」ということになってくるのです。皆さんはどう考えられますでしょうか。

さて、その神話の中でも、天照大神（あまてらすおおかみ）で言う「カミ：神」よりも更に古い「ち」「け」「そ」「くい」「くま」と言われる古層の神名があることが報告されています。今わかっている範囲で、紹介します。まず「ち」の神様から

「ち」の神様については、白川静氏の研究によりますと、『史記』に「魍魎（ちみ）を御（ぎょ）す」とありますが、この魍魎とは「魍魎魍魎（ちみもうりょう）」の魍魎です。これは『古事記』『日本書紀』の神名に見える「ち」と「み」ではないかということです。

神様の名前には、イザナミやオオヤマツミのように「み」を名乗る神様と、ヤマタノオロチ、テナツチ、アシナツチ、オオナムチ、ミズチのように「ち」を名乗る神様があり、「ち」が「み」よりも古層の神名であることが、先学の研究により明かとなっています。この「ち」と「み」が魍魎の語源と共通するのではないかということなのです。

ですから「魍魎を御す」とは東夷の神々とそれを祀る民を服属させたという意味があるのではないかと考えられます。ところが、先の白川氏の研究によれば「御」の本来の字義は「祀る」とのこと。とすれば、「魍魎を御す」とは東夷の神々を祀ったという意味にもとれます。日本列島の神名と思われるものが中国史書に現れるという、面白いテーマではないでしょうか。

解説：白川 静（しらかわ しずか、1910 年 4 月 9 日 – 2006 年 10 月 30 日）は、日本の漢文学者・東洋学者。学位は文学博士（京都大学）。立命館大学名誉教授、名誉館友。福井県福井市出身 出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：魍魎 史記 五帝本紀第一（舜帝）

原文：舜賓於四門、乃流四凶族、遷于四裔、以御魍魎。

（舜、四門に賓し、すなわち四凶族を流して、四裔に遷し、もって魍魎を御ふせぐ。）

訳：『史記』五帝本紀の舜の事績を述べているところで、「舜は凶悪な四家系の者どもを流刑に処して四方の辺境に移し魍魎（山林中にある怪物、人に害をする）を防がせました

解説：魍魎魍魎（ちみもうりょう）とは、山の怪物や川の怪物。様々な化け物、妖怪変化。魍魎は山の怪、魍魎は川の怪であり、一般には山河すべての怪として魍魎魍魎の名で用いられることが多い。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

また丹波地方の地名には「須知」「和知」「福知山」と「チ」のついたものが目立っています。古代に於いて、丹波地方は「チ」の神様が君臨していた名残ではないでしょうか。「愛知」や「高知」も同様だと思います。

「け」の神様について

「ち」の神様と同様に、あるいは更に古い神名に「け」の神様があります。

オバケ、モノノケや『東日流外三郡誌』に見える津保化族のツボケも「け」の神様と思われます。「ボケ」とかの罵倒語もこの「け」の神名に由来するのではないのでしょうか。すなわち、侵略された側の古い神々が差別され、罵倒語として侵略者の側で使用されるというケースです。もしかすると、ホトケという言葉も仏教伝来時に異国の「陰神」という意味で日本列島側で付けられた名称かもしれません。

解説：『東日流外三郡誌』（つがるそとさんぐんし）は、古史古伝の一つで、古代における日本の東北地方、特に現在の青森県のほか岩手県、秋田県を含む北東北などの知られざる歴史が書かれているとされていた、いわゆる和田家文書を代表する文献。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』 内容は資料編を参照のこと。

この神様を「け」と呼んだのはどのような人々でいつの時代でしょうか。北部九州で縄文水田を作った人々ではなかったでしょうか。というのも、有名な北部九州の縄文水田に菜畑遺跡（唐津市）と板付遺跡（福岡市博多区）がありますが、どちらもナバタケ、イタヅケと「け」がついています。また、同じく縄文水田の有田七田前遺跡が近隣にある吉武遺跡群（弥生の宮殿や最古の王墓・福岡市早良区）もヨシタケで「け」がついています。

これらは偶然でしょうか。そうではなく、「け」の神様を地名にもった地域で縄文水田が作られたと考えるべきではないのでしょうか。もし、この推測が正しければ、縄文水田の神々は「け」の神様だった。そうならないでしょうか。

「そ」の神様について

「ち」や「け」の神様と共に、「そ」の神様の存在も提起されています。

阿蘇山や浅茅湾（対馬）、木曾などの地名に残っているアソやキソ、熊襲のクマソなどがその例として上げられています。特にアソやアソウの地名は全国に多数有ります。この他にも、「社」の読みにコソがあり、姫社（ヒメコソ）などの例が著名です（『肥前国風土記』）。ちょっと汚い例ですがクソも、この神名に関係ありそうです。

ただ、この「そ」の神様の場合、「ち」や「け」と異なって、はっきりと「?ソ」とわかる形で神名に残されていないように思います。逆に言えば、それだけ古い神様なのかもしれません。この「そ」の神名、それは、日本の古称の一つである扶桑もフソという神名が語源ではないか。古代日本列島の人々がフソと神様を呼んでいたのを中国人が聞いて、扶桑という漢字を当てたのではないのでしょうか。

ところで、「そ」の神は、延喜式を見ただけでも、「ひめこそ」神社のほかに、「はむこそ」神社、「あまみこそ」神社、「いそ」神社、「をこそ」神社、「そらひこ」神社など、たくさんの「そ」の神がいると思います。

人名では、ヤマトトヒモモソ姫が著名ですが、そのほかにも孝昭天皇（こうしょうてんのう）の皇后に世襲足姫（ヨソタラシ）という人がいて、瀛津世襲（オキツヨソ）の妹とあり、崇神紀に蘇那曷叱知（ソナカシチ）、景行紀に神夏磯媛（カムナツソ）、神功紀に葛城襲津彦（ソツヒコ）、推古紀に蘇因高（ソインコウ）、そしてもちろん蘇我氏。変わったところでは、筑前国嶋郡川辺里戸籍の冒頭に、卜部乃母曾（ノモソ）がいました。なお、「続日本紀」（天平十一年正月ほか）に「倭武助」という人の「やまとのむそ」という読みがあります。

解説：延喜式（えんぎしき）は、平安時代中期に編纂された格式（律令の施行細則）で、三代格式の一つである。三代格式のうちほぼ完全な形で残っているのは延喜式だけであり、細目まで規定されているため、古代史の研究のうえで重視されている。全 50 巻。

巻 8 に祝詞を掲載。巻 9・10 は神名帳（神社の一覧表）となっていて、祈年祭で奉幣を受ける 2861 社の神社が記載されている。延喜式神名帳に記載があるのは当時朝廷から重要視された神社であり、一般に式内社と言って社格の一つとされたが、現在では消滅したり不明となっている神社も多い。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：三代格式（さんだいきやくしき）とは、平安時代に編纂された弘仁格式、貞観格式、延喜格式の三つの格式（律令の補助法令）の総称である。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：孝昭天皇は、日本の第 5 代天皇。『日本書紀』での名は観松彦香殖稻天皇。欠史八代の一人で、実在性については諸説ある。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

『延喜式』の式内社に新具蘇姫命(にいぐそひめのみこと)神社があり、所在地は石見の国、島根県大田市川合町です。同町には石見国一ノ宮の物部神社もあり、古代より当地の中心地だったことがうかがわれます。

現代の感覚でいえば、お姫様の名前に「にいぐそ」はないと思いますが、逆にそれだけ古い神名である証拠ではないでしょうか。おそらく、「にいぐそ」とは新しい糞という意味ではなく、新しい「ぐ」の「そ」の神様のように思われます。「ぐ」の意味はわかりませんが、「かぐつち」や「香具山」と共通する「ぐ」という何らかの概念があったと考えられます。

新具蘇姫命はこの神社にしか祀られていないとのことで、たぶん在地の主神だったと思います。もしかすると石見国を代表する古い神様だった可能性も否定できないと思います。しかも女性の神様ですから、縄文時代にまで遡れるかもしれません。

そうでなければ、一ノ宮の物部神社の近くで、こんな名前の「そ」の神様が祀られ続けてきた理由がわかりません。物部神社よりも古い神様だと思います。さらにいえば、物部神社とも何らかの関係があったのではないかと想像されます。

因幡の白兎



「そ」の神様については、『古事記』の大国主神話（因幡の白兎説話など）の中に登場する八十神が「そ」の神様ではないかと思われます。『古事記』では大国主のたぐさんのお兄さんたちとして扱われていますが、本来は「そ」の神様である八十神と「ち」の神様であるオオナムチとの出雲・因幡の争奪戦争だったのです。

ちなみに、この説話では大国主とはよばれずにオオナムチの名前で八十神と争っています。すなわち金属器以前の時代に起こった「そ」の神様の文明圏と「ち」の神様の文明圏の衝突の伝承が、古事記に大国主神話として記述されていたと思われます。

それでは八十神の本拠地はどこでしょうか。これもひょんなことから判明しました。苗字にも八十があったのです。そこで、電話帳で八十さんの分布を調べましたら、そうしたらなんと、姫路市に集中分布していました。出雲や因幡にはほとんどありません。

『播磨風土記』には、印南郡益気（やけ）の里の斗形（ますがた）山の記事に「石の橋あり。伝えていへらく、上古の時、此の橋天に至り、八十人衆、上り下り往来ひき。故、八十橋といふ。」とここに八十がありました。現在もこの八十橋の伝承地があります。益気（やけ）の里の「や」も八十の「や」と関係ありそうです。

解説：『播磨国風土記』（はりまのくにふどき）は、奈良時代初期に編纂された播磨国の風土記である。平安時代末期に書写された写本が国宝に指定されている。『播磨国風土記』は写本が残されている五つの風土記のうちの一つであるが、『出雲国風土記』のように完本に近い形で残されているわけではない。播磨国の総説、明石郡の全体、加古郡の冒頭、赤穂郡の全体が欠落している。出典: フリー百科事典『ウィキペディア』

また、揖保川（いぼがわ）下流には八十大橋もあります。従って、播磨の地には八十が古代から地名などで存在していることから、苗字の八十さんが姫路市に集中分布しているのも偶然の一致とは考えられません。播磨が八十神の本拠地だったのです。

こうした視点から、先の『古事記』の神話を見直したとき、播磨の八十神と外来勢力であるオオナムチとの出雲・因幡争奪戦という構図が明確に浮かび上がってくるのではないのでしょうか。そうするとオオナムチの本拠地はどこでしょうか。まだわかっていません。

「くい」の神様について

大山咋や三島溝咋など「くい」を持つ神名もあります。地名などにも羽咋・名久井岳・福井・鯉喰などがあります。この神名クイは大陸側にいるクイ族との関係が考えられますが、古代日本列島と大陸との交流が頻繁だった証拠かもしれません。島根県に大山（だいせん）があります。その大山（おおやま）の主神が「大山咋（おおやまくい）」です。

その「咋 クイ」と言いますのは、北方の大河である黒竜江の下流にいた蝦（クイ）族の問題と連なっていると考えます。その蝦（クイ）族の人々については、萩原真子（おぎはら しんこ）さんの論文があります。（小論「アムール下流域の『クイ』に由来する氏族について」『フオクロア』第三号、ジャパン・パブリシャーズ刊、一九七八年一月、所収、当時は旧姓小川。国際商科大学＜現、東京経済大学＞

それは蝦夷（えみし）・蝦夷（えぞ）という字に、共通に「蝦（カイ）」という字が書いてあります。これは蝦（くい）族の蝦（クイ）が元になっているのではないかと論じておられます。「蝦（カイ・クイ）」と言う字には「虫」編が付いていますが、その「虫」編を取ると「遥（はる）かなる」という意味になる。倭人は東夷ですが、中国人は東夷を知っています。それよりもっと東のそれより遠方の遥（はる）かなる東夷という意味を込めて、「蝦（カイ・クイ）」という字をあてた。中国人らしく非常にうまい文字使いです。これには原音が必要ですが、中国人は「クイ kui」という音を元にして、「蝦（カイ クアイ、kui,kuyi）」という音を当てた。



その「クイ」ですが、たくさん日本列島に出てきます。青森県の名久井岳、青森から見ると一つの山ですが、岩手から見ると二つに見える。男女陰陽の山。その麓（ふもと）の八戸には、縄文時代後期の遺跡の是川遺跡や風張遺跡があり、発掘された数多くの出土品、大規模な集落跡があります。風張1遺跡出土の国宝「合掌土偶」が有名です。（左の写真）

その次が上九一色村。これも元の字地名は「上クイ」があります。北陸には羽咋（ハグイ）。神武の奥さんの親父さんがいた大阪の高槻の三島溝[木厥]（ミゾクイ）。岡山に行きまして鯉喰（コイクイ）神社がある。鬼であるといわれた温羅（うら）が鯉に変身し流れに身を隠したという地名説話。九州に「クイ」がないという話もありましたが、『明治前期字地名調査票』（ウマニ書房）を見ますと、かなりあります。それで全国にかなりの「咋 クイ」がある。福井もそうです。「福」という字は漢語です。字に騙されています。フク・イではなく、フ・クイです。

この「クイ」は明らかに天皇家以前の称号です。天皇家が「クイ」を任命したという記録はない。これらの「クイ」は、「大山咋」の「クイ」です。「大山咋（おおやまくい）」という神様はひじょうに古い。『古事記』・『日本書紀』という新しい段階の神様ではないと考えられます。

坐摩神社ざまじんじゃの「くい」神

大阪府中央区久太郎町に、坐摩神社という神社があり何と読むのかわからず、由緒を調べました。それによると、「いかすりじんじゃ」と読み、通称「ざまじんじゃ」と記されていました。

御祭神は次の五柱で、

生井神・いくゐのかみ

福井神・さくゐのかみ

綱長井神・つながゐのかみ

波比岐神・はひきのかみ

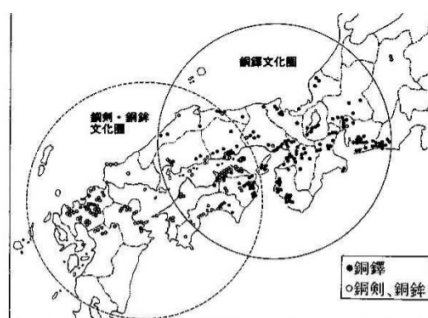
阿須波神・あすはのかみ

最初の三神はいわゆる「くい」神のようです。綱長井神はおそらく「つのくい神」が本来の名称で、後に「つながい」に変化したものと思われます。というのも記紀神話で「いきくい」と「つのくい」がセットで現れる場合があり、西井健一郎さん（古田史学の会会員・大阪市）の説によれば、これは壱岐・対馬に由来する「くい」神であり、かなり古層に位置する神となります。

坐摩神社は『延喜式』にも見える古社であり、摂津国西成郡の大社とされ、豊臣秀吉の大阪城築城にともない現在の場所に移転されたとのこと。

この「くい」神の淵源は少なくとも弥生時代まで遡りますので、この地に弥生時代から存在していた神とすれば、滅ぼされた銅鐸王国の神々だった可能性があります。すなわち、「くい」神は銅鐸圏の神だったのではないかと想像されます。

天孫降臨以来の倭国に滅ぼされた銅鐸圏（狗奴国）にも自らが信仰する神々や祖先神話がなかったはず。その伝承は既に失われているのですが、坐摩神社のような「くい」神を御祭神として祀る神社を探ることで、その実態が解明できるかもしれません。



解説：銅鐸について言えば、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方「銅鐸圏（狗奴国）」であると考えられます。これは、出雲に対して、国譲りという篡奪（さんだつ）が行われたとすることができます。

図の銅鐸文化圏は、現在教科書では、使用されていませんが、この図は出雲の銅鐸文化圏が敗れたあとの勢力図だったと考えられます。

解説：狗奴国（くぬのくに/くぬこく[1][2]、くなのくに[3]/くなく[4]、こなのくに/こなく）は、中国の三国時代の歴史書『三国志』（西晋の陳寿の作）のうちの『魏書』の中の「魏書東夷伝」に記載されている邪馬台国と対立していた倭人の国。

[1]三省堂大辞林 1993

[2].小学館日本大百科全書 1998

[3]. 岩波書店広辞苑第六版 2008

[4]. 平凡社世界大百科事典 1998

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：国譲りという篡奪（さんだつ）については、「六月晦大祓祝詞（ミナズキのツゴモリのオオハラへのノリト）に、「大祓祝詞」ではらう罪がたくさんと書いてあります。これをみると、その罪に二種類あって、「天つ罪」と「国つ罪」と二つに分けて書いてあります。」つまり、「大祓祝詞」で、「天孫降臨のとき」犯した罪をはらうことができるとしています。「大祓祝詞」については、検索「日本古代史の謎 asahinet」で、【第22話ホントは怖い祝詞】を参照して下さい。

「くま」の神様について

神名「くま」について、久留米市には神代と書いてクマシロと読む地名があります。クマという音に神という字を当てられていることから、神様のことをクマと呼んでいた時代や人々のあったことがうかがえます。

地名でも熊本や球磨・千曲・阿武隈・熊毛・熊野などその他多数のクマが見られます。これら全てが神名のクマを意味していたのかは判りませんが、球磨や熊本などは熊襲との関係から、神名のクマの可能性大です。とすれば、熊襲の場合、クマもそも古層の神名となり、これはただならぬ名称ではないでしょうか。記紀では野蛮な未服の民のような扱いを受けていますが、実はより古い由緒有る部族名のように思われます。

『日本書紀』神功紀には千熊長彦（ちくまながひこ）や羽白熊鷺（はじろくまわし）などクマのつく人名が見えます。これらも神名クマに由来していたのではないのでしょうか。

このように考えてみると、球磨川は神様の川となり、熊笹は神様の笹、動物の熊は神様そのもの、ということになるのかもしれません。

さらに、古代朝鮮の神話には、熊女との檀君神話があります。

太古の昔、桓因（ファンイン）という天帝の庶子に桓雄（ファンウン）がいた。桓雄が常に天下の人間世界に深い関心をもっていたので、天符印三筒を与えて天降りさせ、人間世界を治めさせた。部下 3000 人を率いた桓雄は、太伯山（テベクサン）上の神壇樹（シンダンス）下に下りて神市（シンシ）とした。かれは風伯、雨師、雲師をしたがえて穀・命・病・刑・善・悪をつかさどり、人間の 360 余事を治めさせた。

このとき一匹の熊と一匹の虎が洞窟で同居していて、人間に化生することを願っていた。桓雄は一把のヨモギと 20 個のニンニクを与えて、100 日間日光を見ないように告げた。熊は日光を避けること 37 日目に熊女（ウンニョ）になったが、虎は物忌みができず人間になれなかった。

桓雄は人間に化身した熊女と結ばれ、檀君王儉（タングンワンゴム）を産んだ。檀君は中国の堯帝が即位して 50 年目の庚寅の年に、平壤を都として朝鮮と呼んだ。のちに都を白岳山の阿斯達（アサダル）に移して、1500 年間も国を治めた。

周の武王が即位した己卯年に、箕子（キジャ）を朝鮮に封ずると、檀君は阿斯達からかくれて山神となった。寿命が 1908 歳であった。

（姜在彦『朝鮮儒教の二千年』01 朝日選書 p.28）

解説：檀君（だんくん、朝鮮語: 단군）は、13 世紀末に書かれた『三国遺事』に初めて登場する、一般に紀元前 2333 年に即位したとされる伝説上の古朝鮮の王。『三国遺事』によると、天神桓因の子桓雄と熊との間に生まれたと伝えられる。『三国遺事』の原注によると、檀君とは「檀国の君主」の意味であって個人名ではなく、個人名は王儉（おうけん・ワンゴム、朝鮮語: 왕검）という。檀君朝鮮の項目も参照。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：千熊長彦（読み）ちくま ながひこ デジタル版 日本人名大辞典+Plus の解説 「日本書紀」にみえる新羅(しらぎ)(朝鮮)への使者。武蔵(むさし)の人という。神功(じんぐう)皇后摂政 47 年新羅に貢物をうばわれたという百済(くだら)(朝鮮)使の言い分をたしかめるためつかわされる。49 年新羅を討ち、百済王に今後の朝貢をちかわせた。51 年にも百済に派遣され、翌年帰国した。

解説：「羽白熊鷲（はじろくまわし）の碑」は、朝倉市の矢野竹地区にある碑で、古代郷土に一世を風靡した人物として羽白熊鷲を顕彰し、平成 14 年に建立されたものです。記述によると羽白熊鷲は、古代の筑紫の国に名をはせた部族の長で、翼があり高く飛ぶことができる強健な人物といわれています。仲哀（ちゅうあい）天皇の時代に天皇の命に従わず、人々を苦しめる存在だったため、後に仲哀天皇の後である神功皇后が羽白熊鷲を討ちました。皇后が、「熊鷲を討ちて我が心安し」と言ったことから、当地の地名が安（夜須）となったとも伝えられます。一方で、郷土の人々は地元豪族であった羽白熊鷲の勇姿を称え、碑を建立したといわれています。案内板の付近にある、古墳のような盛り土は、羽白熊鷲の墓ともいわれています。

富士山の「ふじ」の意味と語原（説）について、

「ふ」は「生む・生まれる」の意味ではないでしょうか。というのも、なぜ「ふ」に「生」の字が当てられているのだろうかと思いついていました。もしかすると古代日本語で「生む」「生まれる」「生きる」という意味で「ふ」という言葉があり、その音に漢字を当てる際に「生」の字が選ばれたのではないかと考えました。

日本古典文学や言語学の研究者にとっては周知のことかもしれませんが、古代日本語の「ふ」という音の意味に「生む」「生きる」という意味があったとすれば、富士山の「ふじ」とは「生む（ふ）」「古い時代の神様。じ（ぢ）」の合成語で「創造神」あるいは「生きている神（現人神）」ではないか考えます。

この欠点は、富士山の富士は「ふじ」であり、「ふぢ」ではないということです。

ただ『日本書紀』などにも「じ」と「ぢ」が混用されている少数例もあるので、可能性があるのでないでしょうか。傍証としては、静岡県西部に敷知（ふち）郡という地名があり、この「ふち」と富士山の「ふじ」の語原が共通しているのではないかと考えます。

また、「ふ」の神様を示唆する地名に「福井（ふくい）」などがあります。「ふ」の「くい（神）」という合成語です。扶桑も「ふ」の「そ（神）」ではないでしょうか。

これが正しいければ、日本各地に「創造神」あるいは「現人神」を意味する地名や山名が遺存することになり、多元的「天地創造神話」の可能性もうかがわれ、興味深いと思われるのです。

魚を神として祀る文化や風習について、

糸島の高祖神社（たかすじんじゃ）の御祭神は「あらがみ」様とも呼ばれていることと、九州では大魚のクエのことを「あら」と呼んでいることもあって、「あら」という魚と荒神は関連があるのではないかと考えます。

記紀神話で活躍する夫婦の神様、イザナギ・イザナミの名前も鯨の古名「いざな」と共通しており、海洋民族の信仰に基づくものではないかと云われています。

これについて考えますと、イザナギ、イザナミは、神話の中の最後の最後になって出てきます。そして神武東征に継っていきます。これは、イザナギ、イザナミとは、神武の親神と考えられ、それまでの出雲や九州の神話を持ってきて、接続したとも考えられます。岩波の文学体系では、イザナが魚だとして、ギが男、ミが女としていますが、しかし、イサとナギ・ナミではないかという説もあります。先述したように、海人族（あまぞく）の言葉ではないのかと思われます。

神話では、出雲王朝・九州王朝の歴史を王朝史の扱いをせずに、海人族の酋長の扱いをして、海人族史として扱っている事になります。そうしたら神武皇統の姓が、「イサ」なのではないのかと考えられます。

検索しますと「イサ」の姓が一番多いのは、沖縄県です。

「①沖縄県宜野湾市伊佐発祥。琉球王国時代に記録のある地名。琉球音もイサ。」と検索されました。

「イサ」は南方系の倭人だったのではないのでしょうか。神武の両親は、博多湾岸の監視部隊長？だったのかもしれませんが。このように日本の神話は、記紀に取り込まれて、そこに人代部分を接続させていると言うことが出来ると思われれます。

また筑豊地方に鮭を祀る神社（鮭神社。福岡県嘉麻市）がありますが、鮭（さけ・しゃけ）の「け」は古い時代の神様を意味する「け」ではないかと考えられます。

「言素論」で考えると、鮭（さけ・しゃけ）の「け」が古層の神名であれば、鯪（しゃち）の「ち」も古層の神名「ち」に由来するのではないかということを思い。そうすると鮭の「さ・しゃ」と鯪の「しゃ」は語原が共通するのではないかと思考は進展しました。

そこで、鯪の語原を検索すると、アイヌ語で豊漁をもたらす「沖の神」を意味するという説が見つかりました。

だとすれば、鯪を「しゃ」の「ち（神）」とすることも考えられます。

解説：「言素論」について

まず「言素論」成立のための基本的前提として、古代日本語の単語や文字表記において、一般的には「一字・一音節・一義」がより古い形態と考えることがあります。

たとえば、「魚」という字で表記される意味はfishですが、音は「ぎょ」（音読み）と「な」「うお」「さかな」（訓読み）などがあります。このfishを意味する日本語のうち、「な」を最も古いとする、これが「言素論」の基本前提です。

すなわち、「魚」という表記の訓みの「一字・一音節・一義」が「な」なのです。（了）

資料編

解説：『東日流外三郡誌』（つがるそとさんぐんし）は、古史古伝の一つで、古代における日本の東北地方、特に現在の青森県のほか岩手県、秋田県を含む北東北[1]などの知られざる歴史が書かれているとされていた、いわゆる和田家文書を代表する文献。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

内容：『東日流外三郡誌』は、青森県五所川原市飯詰在住の和田喜八郎[2]が、自宅を改築中に「天井裏から落ちてきた」古文書として1970年代に登場した。編者は秋田孝季と和田長三郎吉次（喜八郎の祖先と称される人物）とされ、数百冊にのぼるとされるその膨大な文書は、古代の津軽地方（東日流）にはヤマト王権から弾圧された民族の文明が栄えていたと主張する。

アラハバキを「荒羽吐」または「荒覇吐」と書き、遮光器土偶の絵を載せ、アラハバキのビジュアルイメージは遮光器土偶である、という印象を広めたのも、本書が「震源」である。

同書によれば、耶馬台国の中に邪馬壱国があったという。

前7世紀の日本各地には津止三毛族とか奈津三毛族とか15～16の民族が割拠していたが、そのうち畿内大和（現在の奈良県）にいて安日彦と長髓彦の兄弟（安日彦、武渟川別、長髓彦の三兄弟ともいう）が治めて平和に暮らしていたのが耶馬台国で、日向（現代の宮崎県）にいたのが「日向族」（神武天皇の一族）であった。

耶馬台国の中に邪馬一国、邪馬二国、邪馬三国があったという（つまり邪馬壱国とは邪馬一国のこと）。日向族は台湾の高砂族が北上してきたものだが、その一族を支配するのは巫女で、火を操るヒミコ、水を操るミミコ、大地を操るチミコの三姉妹で、その出自は「アリアン族」だったという。

つまり卑弥呼は九州の女王で、畿内にあった邪馬台国とは無関係ということになる。日向族は筑紫（現在の福岡県）の「猿田族」を酒と美女で騙し討ちにして滅ぼし、破竹の勢いで東進。この時、兄弟の父・耶馬台彦は長門（現在の山口県）に2万の軍で布陣したが迂回され、大和での日向族と耶馬台国との戦いは熾烈を極め、安日彦は片目を射られ、武渟川別は片腕斬断、長髓彦は片脚を失う激戦の末、遠く津軽に落ち延びた。

これより前、津軽にははじめ阿曾辺族（アソベ族）という文化程度の低い未開部族ながらも温厚な種族が平和に暮らしていたが、岩木山が噴火して絶滅しかかったところに津保化族（ツボケ族）というツングース系の好戦的で残虐な種族が海からやって来て阿曾辺族を虐殺し、津軽は津保化族の天下となった。

その後、中国の晋の献公に追われた郡公子の一族がやって来て津保化族を平定、ちょうどその頃神武天皇に追われた耶馬台国の一族もやって来た。郡公子の娘、秀麗、秀蘭（香

蘭とも)の姉妹を安日彦と長髓彦は娶り、諸民族は混血して「荒羽吐族」と号し、「荒羽吐5王」の制(津軽を5区に分けたのか東北地方を5区に分けたのかは判然としないが後者のようである)を敷いて治めたが、これが大和朝廷からは「蝦夷」と呼ばれたのだという。従って蝦夷には元々は中国の文化が色濃く入っていたのである。

蝦夷の首領(安日彦と長髓彦のいずれかの子孫のように書かれているがどちらの子孫なのか判然としない)は、代々「津軽丸」を襲名し、ヨーロッパの国王のように「津軽丸何世」と名乗った。

神武天皇崩御の後、荒羽吐系の手研耳命は大和を支配すること3年。懿徳天皇崩御の後、荒羽吐軍が南下し、空位ならしめた。その後、荒羽吐系の孝元天皇を擁立して大和を間接支配した頃、不老長寿の秘薬を求める秦の始皇帝の使いとして徐福が津軽を訪れ、津軽の文化が中国に似ているので驚いたという。津軽丸は荒羽吐族が中国人との混血であることを解説し、徐福にカモメの金玉を授けた。

その後やがて、朝鮮半島から「カラクニ皇」なる者(崇神天皇?)がやってきて大和方面は奪われてしまったという。しかし中国の歴史書にでてくる「倭の五王」とは実は日本の天皇ではなく津軽丸のことだったのである。奈良時代には荒羽吐系の孝謙天皇を擁立。

その後も津軽丸は万世一系に続き、安倍貞任を経て、安東氏(安藤氏)に至るのである。なお和田が生前主張していたところによれば、安東氏後裔との伝えを持つ秋田氏が藩主の陸奥三春藩を襲った大火で舞鶴城所蔵史料が焼失したため、藩主の命を受けた秋田孝季が妹婿の和田長三郎吉次や菅江真澄らの助力を得て、寛政年間から史料蒐集や諸国踏査を行い、その成果が和田家に秘蔵されてきたとされた[3]。

十三湊は、安東氏政権(安東国)が蝦夷地(津軽・北海道・樺太など)に存在していた時の事実上の首都と捉えられ、満洲や中国、朝鮮、欧州、アラビア、東南アジアとの貿易で栄えた。欧州人向けのカトリック教会があり、中国人、インド人、アラビア人、欧州人などが多数の異人館を営んでいたとされる。それどころか、満洲の地に残る「安東」の地名は安東氏の足跡なのだとする。

しかし「興国二年の大津波」(1341年、南朝:興国2年、北朝:暦応4年)によって十三湊は壊滅的な被害を受け、安東氏政権は崩壊したという(津波はその1年前ともいう)。以上

あ行

あ

青沼馬沼押比売神（あおぬまぬおしひめ）

阿加流比売神（あかるひめ）

飽咋之宇斯能神（あきぐいのうし） - 伊弉諾尊の冠から神になる

秋比売神（あきびめ）

秋山之下氷壮夫（あきやまのしたびおとこ）

阿久斗比売（あくとびめ）

悪樓（あくる）

浅間大神（あさま）:⇒木花之佐久夜毘売

足柄之坂本神（あしがらのさかもと）：坂の神

阿遲鉏高日子根神（あじすきたかひこね） - 農業、雷、不動産業の神

葦那陀迦神（あしなだか）：「古事記」にみえる女神。

足名稚命、脚摩乳命（あしなづち）：⇒脚摩乳・手摩乳

葦原色許男神（あしはらのしこお）：⇒大国主

阿須波神（あすは）

阿曇大浜（あずみのおおはま）：阿曇(あずみ)氏の祖

吾田媛（あたひめ）:⇒木花之佐久夜毘売

熱田大神（あつた）：⇒天叢雲剣（草薙剣）・三種の神器

阿曇磯良（安曇磯良）（あづみのいそら） - 海の神

姉倉比売神（あねくらひめ）

穴戸神（あなと）

沫那藝神（あはなぎ）：⇒速秋津日子神参照

沫那美神（あはなぎ）：⇒速秋津日子神参照

淡島神（あわしまのかみ）

あま・あめ

天知迦流美豆比売神（あましかみづひめ）

天津国玉神（あまつくにたま）

天久米命（あまつくめ）

天津彦根命、天津日子根命（あまつひこね） - 日の神、海の神、風の神

天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命（あまつひこひこなぎさたけうがやふきあえず）：⇒鵜葺草葺不合

天津日高日子番能迦迹芸命（あまつひこひこほのになぎ）：⇒瓊瓊杵

天津日高日子穗穗手見命（あまつひこひこほほでみ）：⇒火遠理

天津日高彦瓊瓊杵尊（あまつひたかひこにになぎ）：⇒瓊瓊杵

天津日高彦火火出見尊（あまつひたかひこほほでみ）：⇒火遠理

天津麻羅（あまつまら） - 鍛冶の神

天津甕星（あまつみかぼし） - 星の神

天御虚空豊秋津根別（あまつみそらとよあきづねわけ）：⇒国産み参照

天照御魂神（あまてるみたま）：⇒天火明、天照大神、饒速日など諸説ある。

天照大神（あまてらすおおみかみ） - 三貴子、太陽神

天照大御神（あまてらすおおみかみ）：⇒天照大神

天照国照彦天火明櫛玉饒速日命（あまてるくにてるひこあめのほあかりくしたまにぎはやひ）：⇒饒速日

天石門別神、天石戸別神（あまのいわとわけ）

天種子命（あまのたねこ）

天道根命（あまのみちね）

天活玉命（あめのいくたま）

天宇受売命（あめのうずめ） - 芸能の女神

天之忍男（あめのおしお）：⇒知訶島

天之忍許呂別（あめのおしころわけ）：⇒国産み参照

天忍日命（あめのおしひ）

天之忍穗耳命（あめのおしほみみ）- 稲穂の神、農業神
天之尾羽張神（あめのおはばり）
天鏡尊（あめのかがみ）
天迦久神（あめのかく）：⇒天之尾羽張参照
天香山命（あめのかぐやま）
天香語山命（あめのかごやま）：⇒天香山命
天神玉命（あめのかむたま）
天神櫛玉命（あめのかむくしたま）⇒天神玉命
天之久比奢母智神（あめのくひざもち）：⇒速秋津日子神参照
天之闇戸神（あめのくらど）：⇒大山津見神参照
天児屋命（あめのこやね）- 託宣の神
天之狹霧神（あめのさぎり）：⇒大山津見神参照
天探女（あめのさぐめ）
天之狹土神（あめのさづち）：⇒大山津見神参照
天之狹手依比売（あめのさでよりひめ）：⇒国産み参照
所造天下大神（あめのしたつくらし）：⇒大国主
天手力男神（あめのたちからお）- 腕力・筋力を象徴する神
天棚機姫神（あまのたなばたひめ）- 織機の神
天之都度間知泥神（あめのつどへちぬ）
天之常立神（あめのとこたち）- 始源神、天空神
天豊足柄姫命（あめのとよたらしからひめのみこと）
天鳥船神（あめのとりふね）：⇒鳥之石楠船神
天苗加命（あめのなえますのみこと）
天羽槌雄神（あめのはづちのお）
天日照命（あめのひでり）：⇒建比良鳥命
天一根（あめのひとつね）：⇒姫島（大分県）
天比登都柱（あめひとつはしら）：⇒国産み参照
天夷鳥命（あめのひなどり）：⇒建比良鳥命
天日腹大科度美神（あめのひばらおおしなどみ）
天日鷲神（あめのひわし）- 豊漁、商工業繁栄、開運、開拓、殖産の守護神
天之吹男神（あめのふきお）：⇒家宅六神
天両屋（あめふたや）：⇒両児島
天太玉命（あめのふとだま）：⇒布刀玉命
天之冬衣神（あめのふゆきぬ）
天火明命（あめのほあかり）
天之菩卑能命、天穗日神（あめのほひ）- 出雲国造の祖
天目一箇神（あめのまひとつ）- 鍛冶の神
天之御影神（あめのみかげ）：⇒天目一箇神
天之甕主神（あめのみかぬし）
天之水分神（あめのみくまり）：⇒水分神
天御虚空豊秋津根別（あめのみそらとよあきつねわけ）
天美津玉照比売命（あめのみつたまてるひめ）
天之御中主神（あめのみなかぬし）- 宇宙の根源神
天御柱命（あめのみはしら）：⇒級長津彦命
天三降命（あめのみふり）
天八現津彦命（あめのやあきつひこ）
天八意思兼（あめのやごころおもいかね）：⇒思兼神（おもいかね）
天八十萬魂尊（あめのやそよろず）
天湯河板拳（あめのゆかわたな）
天若日子、天稚彦（あめのわかひこ、あめわかひこ）
荒熊大神（あらくまおおかみ）
淡道之穂之狹別島（あわじのほのさわけしま）
沫那芸神（あわなぎ）⇒速秋津日子神参照

沫那美神（あわなみ）⇒速秋津日子神参照

い・う・え・お

五百箇磐石尊（いおついわむら）

座摩神（いかすりのかみ）

活玉前玉比売神（いくたまさきたまひめ）

活津日子命（いくつひこね）

伊古奈比咩（いこなひめ）：伊古奈比咩命神社

伊古麻都比古神（いこまつひこ）：往馬坐伊古麻都比古神社

伊古麻都比賣神（いこまつひめ）：往馬坐伊古麻都比古神社

伊佐我命（いさが）⇒櫛八玉神

伊弉諾尊、伊耶那岐命（いざなぎ）- 創造神、国生みの神

伊弉冉尊、伊耶那美命（いざなみ）- 創造神、国生みの神

石凝姥命（いしこりどめ）- 金属加工の神、鏡の神

伊豆山神（いずさんじん）⇒火牟須比（ほのむすひ）、伊弉諾尊（いざなぎ）、伊弉冉尊（いざなみ）

伊須流伎比古（いするぎひこ）

伊勢津彦（いせつひこ）：『伊勢国風土記』逸文に見える神

五十猛神（いそたける、いたける）- 林業、造船、航海安全、大漁の神

市杵嶋姫神（いちきしまひめ）⇒宗像三神

一目連神（いちもくれん）⇒天目一箇神

伊豆那姫命（いづなひめ）

伊豆能売（いづのめ）- 厄払いの神

稻背脛命（いなせはぎ）：天穗日神の子

井氷鹿（いひか）

石押分之子（いわおしわくのこ）

磐裂神・根裂神（いわさく・ねさく）- 武神

石巢比売神（いわすびめ）⇒家宅六神

石土毘古神（いわつちびこ）⇒家宅六神

磐筒男神（いわつつのを）- 武神

磐筒女神（いわつつのめ）⇒磐筒男神

葦夜神（いや）

磐長媛命（いわながひめ）- 不老長生の神

宇迦之御魂神（うかのみたま）- 穀物の神

鵜葺屋葺不合命（うがやふきあえず）- 農業の神

保食神（うけもち）- 食物神

宇比邇神・須比智邇神（うひに・すひちに）- 大地の様子を表す神

宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこぢ）- 活力を司る神

蛤貝比売、宇武賀比売命（うむぎひめ、うむかひめ）⇒蛤貝比売・蛸貝比売

表筒男命（うわつつのお）⇒住吉三神

天表春命（うわはる）- 開拓、学問、技芸、裁縫、安産、婦女子の守護神。

榎本神（えのもと）：榎本神社

大麻比古命（おおあさひこ）

大雷（おおいかづち、おほいかつち）⇒火雷大神

意富加牟豆美命（おおかむづみ）

大日真神（おおぐちまがみ）- 日本狼の神格化

大国主神（おおくにぬし）

大気都比売神（おおげつひめ）- 食物神

大事忍男神（おおごとおしお）

大年神（おおとし）⇒年神

意富斗能地神・大斗乃弁神（おおとのぢ・おおとのべ）- 大地の様子を表す神

大戸日別神（おおとひわけ）⇒家宅六神

大直毘神（おおなおび）⇒直毘神

大己貴神（おおなむち）⇒大国主

大野手比売（おおぬでひめ）
大日靈貴神（おおひるめのむち）：⇒天照大御神
大禍津日神（おおまがつひ）：⇒禍津日神
大宮能売神（おおみやのめ）：⇒八神殿
大物忌神（おおものいみ）
大物主神（おおものぬし）- 水神、雷神
大屋都比賣神（おおやつひめ）：⇒大屋都姫・都麻津姫
大屋毘古神（おおやびこ）：⇒家宅六神・五十猛神
大山咋神（おおやまくい）- 山の地主神、農耕の神
大山津見神（おおやまつみ）- 山の神、海神
大綿津見神（おおわたつみ）：⇒綿津見神
淤加美神（おかみ）- 水神
奥疎神（おきさかる）- 伊弉諾尊の左手の腕輪から神に成る
興玉神（おきたまのかみ）
奥津甲斐弁羅神（おきつかいべら）- 伊弉諾尊の左手の腕輪から神に成る
奥津那藝佐毘古神（おきつなぎさひこ）- 伊弉諾尊の左手の腕輪から神に成る
奥山津見神（おくやまつみ）：⇒迦具土神参照
乙子狭姫（おとごさひめ）
大戸惑子神（おほとまとひこのかみ）：⇒大山津見神参照
大戸惑女神（おほとまとひめのかみ）：⇒大山津見神参照
淤加美神（おかみ）
淤美豆奴神（おみずぬ）
思金神（おもいかね）- 知恵の神
淤母陀琉神・阿夜訶志古泥神（おもだる・あやかしこね）- 大地の様子を表す神

か行

迦具土神（かぐつち）- 火の神
風木津別之忍男神（かざけつわけのおしお）：⇒家宅六神
春日神（かすが）
家宅六神（かたくろくしん）- 石の神、門の神、屋根の神、風神
金屋子神（かなやこ）- 鍛冶職人に信仰される神
金山彦神（かなやまひこ）- 鉾山の神、鉾業・鍛冶の守護神
金山姫神（かなやまひめ）- 鉾山の神、鉾業・鍛冶の守護神
神直毘神（かみなおびかみ）- 直毘神の石柱
神皇産靈神（かみむすび）- 創造神
神大市姫神（かむおおいちひめ）- 農耕神、食料神
神屋楯比売（かむやたてひめ）
迦毛大御神（かも）：⇒阿遲鉏高日子根神
賀茂建角身命（かもたけつぬみ）
賀茂玉依姫（かもたまよりひめ）：⇒玉依姫
賀茂別雷神（かもわけいかづち）
加夜奈留美命、賀夜奈流美（かやなるみ）
鹿屋野比売神（萱野姫神）（かやのひめ）- 草の神
韓神（から）
蚶貝比売、枳佐加比売命（きさがいひめ、きさかひめ）：⇒蛤貝比売・蚶貝比売 - 赤貝の神格化
木祖神（きのおや）：⇒杉原大神
木保神（きのまた）- 木の神、水神、安産の神
金鷄（きんとび、きんし）
久延毘古（くえびこ）- 田・農業の神、土地の神、学業・知恵の神
久久能智神（くくのち）- 木の神
菊理媛神（くくりひめ）- 縁結びの神
櫛磐間戸神（くしいわまど）
櫛玉命（くしたまのみこと）：⇒饒速日命

櫛名田姫神（くしなだひめ） - 稲田の女神
櫛真智命（くしまち）
櫛八玉神（くしやたま）
九頭龍大神（くずりゅう）
国忍富神（くにおしとみ）
国魂（くにたま）
国狭槌尊（くにさつち） - 大地の様子を表す神
国之久比奢母智神（くにのくひさもち）：⇒速秋津日子神参照
国之闇戸神（くにのくらど）：⇒大山津見神参照
国之狭霧神（くにのさぎり）：⇒大山津見神参照
国之狭土神（くにのさづち）：⇒大山津見神参照
国之常立神（くにのとこたち） - 始源神、大地神
国之水分神（くにのみくまり）：⇒水分神 - 水の神
国御柱命（くにのみはしら）：⇒級長戸辺命
熊野速玉男神（くまのはやたまのお）：熊野速玉大社
熊野久須毘命（くまのくすび）
熊野牟須美神（くまのふすみ）：熊野那智大社
闇淤加美神、闇竈神（くらおかみ）：⇒淤加美神
闇御津羽神（くらみつは） - 水神
闇山津見神（くらやまつみ）：⇒迦具土神参照
黒雷（くろいかづち、くろいかつち）：⇒火雷大神
家都御子神（けつみこ）：熊野本宮大社
苔牟須売神（こけむすめ）
事解之男神（ことさかのお）
事代主神（ことしろぬし） - 託宣神、海神、五穀豊穰商売繁盛の神
木花之佐久夜毘売（このはなのさくやびめ） - 火の神、水神、妻の守護神、安産の神、子育ての神、酒造の神
木花知流比売（このはなちるひめ）

さ行

賢彦名神（さかしなひこな）
前玉比売（さきたまひめ）
折雷（さくいかづち、さくいかつち）：⇒火雷大神
福井神（さくいのかみ）
辟田彦、杉原彦（さくたひこ、すぎはらひこ）：⇒杉原大神
辟田姫（さくたひめ）：⇒杉原大神
刺国大神（さしくにおおかみ）
刺国若比売（さしくにわかひめ）
佐保姫（さほひめ） - 春の女神
寒川比古命（さむかわひこ）
寒川比女命（さむかわひめ）
猿田彦（さるたひこ） - 道の神、旅人の神
塩土老翁（しおつちのおじ） - 航海の神、潮流を司る神、製塩の神
磯城津彦命（しきつひこ）
敷山主神（しきやまぬし）
思子淵神（しこぶち）：⇒七シコブチ
下照姫神（したてるひめ）
天下春命（したはる） - 開墾の神
志那都比古神（しなつひこ） - 風神
級長戸辺命（しなとべ）：⇒志那都比古神
白山比咩神（しらやまひめ）：⇒菊理媛神
杉原大神（すぎはら）
少彦名神（すくなひこな） - 国造りの協力神、常世の神、医薬の神、温泉の神、呪術の神、穀物神、知識の神、酒造の神、石の神

須佐之男命、素盞鳴尊（すさのを） - 三貴子、海神、嵐の神
須勢理毘売命（すせりびめ）
住吉三神（すみよし） - 水神
瀬織津姫命（せおりつひめ）
底筒男命（そこつつのお）：⇒住吉三神
ソソウ神：⇒諏訪大神

た行

高淤加美神、高麗神（たかおかみ）：⇒淤加美神
高御産巢日神（たかみむすひ） - 創造神
高照光姫大神命（たかてるひめ）
多岐都比売命（たぎつひめ）
多紀理毘売命（たきりびめ）
栲幡千千姫命（たくはたちぢひめ） - 織物の神
建葉槌命（たけはづち）：⇒天羽槌雄神 - 織物の神、機械の神
建比良鳥命（たけひらとり）
建御雷神（たけみかづち） - 雷、剣の神
建御名方神（たけみなかた）：⇒諏訪（須波）大神
建御名方富命彦別神（たけみなかたとみのみことひこがみわけ）
田心姫神（たごりひめ）：⇒多紀理毘売命
手力男命（たぢからお）：⇒天手力男命
立速男命（たちはやお）：⇒天児屋命
竜田姫（たつたひめ） - 秋の女神
多邇具久（たにく）
多比理岐志麻流美神（たひりきしまるみ）
玉祖命（たまのおや） - 勾玉の神
玉依毘売（たまよりびめ）：鸕鷀草葺不合尊の妻
玉依姫（たまよりびめ）：媛蹈鞰五十鈴媛命や賀茂別雷命などの母
玉依毘売命（たまよりびめ）：邇芸速日命の母
道保神（ちまたのかみ） - 伊弉諾尊の袴から神に成る
撞櫛巖魂天疎向津姫命（つきさかきいつみたまあまさかるむかつひめ）：⇒瀬織津姫
月読命（月読尊、月弓尊、月夜見尊）（つくよみ、つくゆみ、つきよみ） - 三貴子、月神
土雷（つちいかづち、つちいかつち）：⇒火雷大神（ほのいかづち）
角杙神・活杙神（つめぐい・いくぐい） - 大地の様子を表す神
都麻津比賣神（つまつひめ）：⇒大屋都姫・都麻津姫
頼那藝神（つらなぎ）：⇒速秋津日子神参照
頼那美神（つらなみ）：⇒速秋津日子神参照
手名稚命、手摩乳命（てなづち）：⇒脚摩乳・手摩乳
遠津待根神（とおつまちね）
遠津山岬多良斯神（とおつやまさきたらし）
時量師神（ときはかし） - 伊弉諾尊の袋から神に成る
年神、歳神、大年神、御年神、若年神、大歳神、正月様、恵方様、歳徳神（とし）
鳥取神（ととり）
鳥鳴海神（とりなるみ）
豊宇氣毘売神（とようけびめ）
豊雲野神（とよくもの） - 大地の様子を表す神
豊玉毘売（とよたまびめ） - 海神、龍神
豊日別大神（とよひわけ）
鳥之石楠船神（とりのいわくすふね） - 船の神、運輸・交通の神

な行

ないの神（地震の神）
直毘神（なおび） - 厄払いの神

長白羽神（ながしらはのかみ）
中筒男命（なかつつのお）：⇒住吉三神
泣沢女神（なきさわめ）- 水神、井戸の神
鳴雷（なるいかづち、なるいかつち）：⇒火雷大神
丹生都姫（にうつひめ）：丹生都比売神社
饒速日命（にぎはやひ）
邇邇芸命（ににぎ）- 稲穂の神、農業神
沼河比売（ぬなかわひめ）
布忍富鳥鳴海神（ぬのおしとみとりなるみ）
は行
波自加弥神（はじかみ）：檍椒神社
八幡神（はちまん、やはた）
埴安神（はにやす）、埴安彦神（はにやすひこ）、埴山姫神（はにやまひめ）- 土の神
速秋津比古神・速秋津比売神（はやあきつひこ・はやあきつひめ）- 川の神、港の神
早池峰大神（はやちね）
速甕之多気佐波夜遅奴美神（はやみかのたけさはやじぬみ）
祓戸大神（はらえど）
日河比売（ひかわひめ）
比佐津媛（ひさつひめ）
一言主神（ひとことぬし）
日名照額田毘道男伊許知邇神（ひなてるぬかたびちおいこちに）
火之迦具土神（ひのかぐつち）：⇒迦具土神
槌速日神（ひはやひ）- 火の神
比々羅木之其花麻豆美神（ひひらぎそのはなまづみ）
比売大神（姫大神）（ひめ）
蛭子神（ひるこ）
深淵之水夜礼花神（ふかぶちのみずやれはな）
伏雷（ふすいかづち、ふすいかつち）：⇒火雷大神
経津主神、布都努志命（ふつぬし）
布帝耳神（ふてみみ）
布刀玉命、太玉命（ふとだま）- 託宣の神
布怒豆怒神（ふぬずぬ）
布波能母遅久奴須奴神（ふわのもちくぬすぬ）
辺疎神（へさかる）- 伊弉諾尊の右手の腕輪から神に成る
辺津甲斐弁羅神（へつかいべら）- 伊弉諾尊の右手の腕輪から神に成る
辺津那芸佐毘古神（へつなぎさびこ）- 伊弉諾尊の右手の腕輪から神に成る
火遠理命（ほおり）- 山幸彦、稲穂の神
火須勢理命（ほすせり）- 稲穂の神
火照命（ほでり）- 海幸彦、稲穂の神
火雷大神（ほのいかづち）
火牟須比・火産霊（ほむすび）：⇒軻遇突智

ま行

禍津日神（まがつひ）- 災厄の神
登美夜毘売（みかしきやひめ）
甕主日子神（みかぬしひこ）
甕速日神（みかはやひ）- 火の神
水分神（みくまり）
御食津神（みけつ）：八神殿
三島神（みしま）：三嶋大社
溝咋姫神（みぞくいひめ）：⇒玉櫛媛
道乃長乳齒神（みちのながちは）- 伊弉諾尊の帯から神に成る
罔象女神（みづはのめ）、弥都波能売神（みづはのめ）- 水神

御年神（みとし）：⇒年神
水内神（みのち）：持統天皇が天候回復を祈願⇒建御名方彦神別命
水光姫（みひかりひめ）- 水神、井戸の神
三穂津姫（みほつひめ）
観松彦色止命（みまつひこいろと）：⇒天八現津彦命
美呂浪神（みろなみ）
武塔神（むとう）
胸鉏比売（むなすきひめ）

や行

八現津彦命（やあきつひこ）：⇒天八現津彦命
八重事代主神（やえことしろぬし）：⇒事代主
八河江比売神（やがわえひめ）：矢川神社 - 諸芸上達・諸願成就の神
八雷神（やくさのいかつち）：⇒火雷大神
八坂刀売神（やさかとめ）
八島土奴美神（やしまじめみ）
八島牟遲能神（やしまむじ）
八十禍津日神（やそまがつひ）：⇒禍津日神
八咫鳥（やたがらす）
八束水臣津野命（やつかみずおみつぬ）：⇒国引き神話、淤美豆奴神
倭大国魂神（やまとおおくにたま）
山彦、山幸彦（やまひこ、やまさちひこ）：⇒火遠理命
八意思兼神（やごころおもいかね）：⇒思兼神
由良比女命（ゆらひめ）：⇒由良比女神社
ら行・わ行
若雷（わかいかつち、わかいかつち）：⇒火雷大神
若宇加能売神（わかうかのめ）
若尽女神（わかつくしひめ）
稚日女尊（わかひるめ）
和加布都努志能命（わかふつぬし）
稚産霊（わくむすび）- 穀物の生育を司る神
別雷大神（わけいかづち、わけいかづち）：⇒賀茂別雷命
和豆良比能宇斯能神（わずらいのうし）- 伊弉諾尊の衣から神に成る
綿津見（わたつみ）- 海神

以上